柔道選手負傷後の活動休止・継続判断の背景について
ＢＳＳＣ部活動経験者の回顧を通して

竹村　大輔（競技スポーツ学科　コーチングコース）
指導教員　吉川　文人

キーワード：負傷経験，継続判断，回顧

1.　緒言

柔道は，互いに相手の身体を制しつつ技を施す競技であり，他のスポーツに比べ，怪我を起こしやすい競技であると考えられる．日本体育協会が柔道を含めた 9 種目の高校生アスリート 14,226 名を対象として実施したアンケート調査によると，高校生アスリートの怪我発症率は 6 割を超えるとの報告もあり，高校柔道競技者は，何らかの怪我を抱えながら競技をしていると推察される．

宮崎ら（1997）は，負傷したアスリートらは，指導者に怪我の報告をすることが少ないことを指摘している．また，スポーツ傷害発生後の練習休止・継続の判断が，柔道に限らず，実際の現場では医師の適切な診断，治療を受けずにアスリート本人や指導者に任され，十分な治療期間がとられていない問題を指摘している．しかしながら，アスリート負傷後の活動休止・継続の判断理由など十分に調査研究がなされておらず，その背景について十分に資料が収集されているとはいえない．

そこで本研究は，上記のように競技活動の継続判断に至る過程や背景について BSSC 部活動経験者の回顧を通し，アスリート負傷後の競技休止・継続判断について基礎的資料を収集することを目的とする．

2.　調査方法

調査対象は，BSSC に在籍する高校柔道経験者 11 名とし，質問－回答形式の電話インタビューで行った．

質問内容として，怪我発生後指導者に報告できたのか否か，怪我発生後の練習継続，休止判断は誰によるものか，またその理由などを尋ねるなど，合計 22 個の質問を用意した．それに対して調査協力者が，高校時代の柔道経験を回顧しながら回答を行い，その内容を記録した．このような流れで調査を行った．

3.　結果と考察

図は，怪我発生後における指導者への報告の有無に対して得られた集計結果である．報告しない理由として，「競技を休みたくない」「報告するほどの怪我ではない」などの回答が得られ，報告する理由は「自分の状態を知らせるため」「指導者に見られていた」といった回答だった．また，症状次第といった回答は「競技を続けられる痛みだと報告しない」という回答であった．回答者の中には，指導者の顔色を窺い報告しない者もおり，報告しても競技を続ける者もいた．

競技継続の背景として「休むと指導者に怒られる」「休む程度の痛みではない」などがあり，これらの結果を指導者はどう捉えるのか追究する必要があると考えられる．

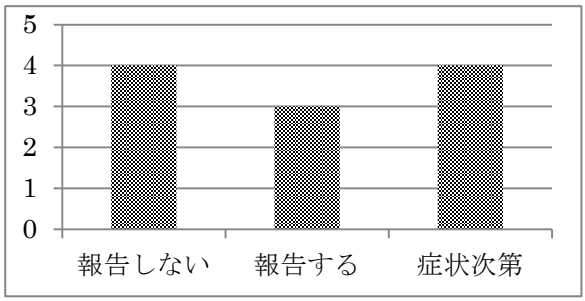

図１　怪我発生後における BSSC 所属高校柔道経験者の指導者への報告の有無

4.　まとめ

本研究では，BSSC 部活動経験者の回顧を通し，アスリート負傷後の競技休止・継続判断についてインタビュー調査を行った．アスリートは，「練習を休みたくない」「休むと周りとの差が生まれる」などの理由で競技を続ける判断が多い背景がみられた．

引用・参考文献

宮崎誠司ら（1997）大学柔道選手における傷害の現状．東海大学スポーツ医科学雑誌 9：9-12.